

に挟んだ。並立する二つの家系を一直線に並べる改ざんの手口は、葦原中つ国でも同様だった。

素戔鳴：猿田彦——深淵の水やれ花——天之冬衣——大國主（大己貴）

——八重事代主

……下照姫

その後の大己貴は播磨に移り、彦火明の帝王教育に打ち込んだ。つまり、火軻遇突智が火神の最高位や山王に昇るべく修練した課程をそっくり踏襲しつつ、政に参加できる機会を待っていた。ところで、伊奘諾夫婦は熊野で神仙三昧に明け暮れていたが、大妃が病に倒れて先立った。有馬村（熊野市）の花の窟では、花を供えた葬儀がしめやかにとり行われたという。

●瓊瓊杵の出現

日神と高皇産霊は忍穗耳に八咫鏡・天叢雲剣を授けて、再度詔した。

「先ほど、葦原中つ国を平定した知らせを受け取った。吾が児の忍穗耳は日高と共に葦原中つ国に立ち寄ってから、大倭に天降って日高国を立て、東方の豊葦原瑞穂国も大倭豊秋津島も治めなさい。大倭に到着したなら、すぐさま御殿中央に祭壇を飾って天璽の鏡剣を奉祭し、日神と高皇産霊を日の神として祀るように。忍穗耳が私たち夫婦を祀ることは、次の倭王に立ったも同然だ」

この時、高皇産霊は天兒屋と太玉も呼びつけ、
「今となっては彦火明一人が天孫であり、いずれ皇位を継ぐ身にある。そうであれば、今から磐座や檜御柱の祭祀を伝授しておきたい。二人は天孫の許に檜御柱を持参して、一切を教えておくように」

と言って忍穗耳への随行を命じた。続いて、日神も二人に命じた。

「我が孫の許を去った後は、忍穗耳に仕えて宮殿の警護に当たるように」
ついで、その場に居るはずもない大物主に対しても、

「八十万の神々を率いて、永久に皇孫のために護り奉れ」と詔した。

『古事記』、「天照大御神、高木神の命もちて、太子正哉吾勝勝速日天忍穗耳命に詔りたまひしく、『今、葦原中国を平ことむけおえぬと白せり。故、言依さしたまいし随あまくだに、降りまして知らしめせ。』とのりたまいき。」

『日本書紀』、「この時に、天照大神、手みに宝鏡たからを持ちたまいて天忍穗耳に授けて、祝ほきて曰のたまわく、『吾が児、この宝の鏡を視みさまむこと、当に吾を視みることくすべし。与ともに床を同くし殿おとのを共にして、齋鏡いはいのとすべし』とのたまう。・・」

この噂が大倭に伝わると、大己貴は強い調子で異論を唱え出した。

「忍穗耳が次の倭王に立つのは、納得し難い。伊弉諾の跡継は豊受皇太神、次に火天神の天鹿兕山と決まっていた。私が葦原中つ国の国譲りに潔く応じたのも、火天神の御子に国譲りすると決めたことだった。

皇太神が義父に逆らったとは言え、夫と妻が互いに現人神と語って刃を交え、勝ちをおさめた側が好き勝手な太子を立てるのは、如何なものか。

そもそも先の国の乱れも、伊弉諾の大妃が我が児を太子に立てるようにと夫にせがんだことにある。日神は今、これと同じことを始めている。これでは、再び国が乱れても致し方あるまい」

大己貴は正論を吐いている風にも見えるが、一刻も早く彦火明を倭王に担ぎたかっただけだ。大物主も日高の家中に日隈が紛れ込んでいると知るや、大己貴に口裏を合わせた。彼は、天神の御子・忍穗耳を豊葦原瑞穂国王・大倭豊秋津島王に迎えたいと申し出たが、日隈まで連れて来ようとは予想だにしていなかった。

当の忍穂耳は、二度と国を割ってはならぬという想いから、心ならずも引き下がる決意を日神に伝えてきた。双方が相手の出方を探る中で、忍穂耳は大己貴と大物主の策謀を蹴飛ばしてやると言わんばかりに、自分の跡継を願い出たのだった。

「ところで、私は彦火明だけを天孫として届けましたが、妻は瓊瓊杵にぎぎという実子をこつそり産み育てておりました。私に代わり、瓊瓊杵を太子として降臨させて下さい。これを条件に、太子を降ります」

『古事記』、『僕は降らむ装束よそいしつる間に、子生れ出でつ。(火瓊瓊杵尊ぞ。)この子を降すべし』ともおしたまいき。」

日神と高皇産霊は、もう一人の天孫が、突如出現したことに驚いたが、「天孫が二人に増えたのは、むしろ喜ばしいことだ」

「忍穂耳の望みも叶えてやらねばなるまい。太子の件はゆるりと考えよう」と言って結論を先送りした。日神は四人のまぢまちな意見を頭に留め置きながら、

「いずれにせよ、天孫が皇位を継ぐのだから、二人の成長をとくと見届けてから決めても遅くはあるまい。それに大乱の鎮まった今では、現人神を担ぐ大義も乏しくなった。以後、祭壇に祀るべき天神は、御魂に限るとしよう。時期を見て、私も天神を降ります。」

だからと言って、伊弉諾の命を狙った天鹿兎山の児(日子坐王)には、断じて皇位を継がせない。犬猿関係にある三輪と日隈についても、東と西の端に引き離しておくしかない。それに、私の肩には熊野家再興の重責がずっしりとのしかかっている」

彼女はあれこれ思案を巡らせたものの、あちらを立てればこちらが立たずで、これら全てを解

決する妙策を見出せなかつた。そこで何度も高皇産霊と相談した結果、何もかも思い通りにことが運ぶ詔を降すことができた。

一、日神は日向の天（水）勢を率いて大倭に遷座し、厳之国王朝を天（厳）王朝につくり替える。

一、頃合を見て、日神は天神の座から降りる。以後、亡き天鹿兎山だけを天神と定める。

一、彦火明は天火明と名のり、瓊瓊杵、日子坐王ともども火天神の御子となれ。

一、火天神の御子はいずれも、その印しの天鹿兎弓・天羽羽矢を所持せよ。

一、日高国を日前国ひのまえと日高見国ひだかみに二分して、天火明と火瓊瓊杵ほのくにぎにそれぞれ継がせる。

天火明は天（日）・日高と共に日隈勢を率いて薩摩吾田に日前国を興し、南蛮勢に立ち向かえ。火瓊瓊杵は残りの日高を率いて大倭に日高見国を立て、日前の後詰となつて走り回れ。

一、今後、天神の御子をこつそり産み育ててはならぬ。必ず、申し出ること。

日神はこの詔によつて、大己貴の主張どころか策謀までも封じ込めることができた。だが、大己貴と大物主も然る者だつた。策を弄するのが朝夕の飯より好きな二人は、これが詔だつたにもか

かわらず裏をかくことに熱中して、極秘に事を進めていた。その秘め事を耳打ちしておこう。

一、火瓊瓊杵を吾田に追いやり、代わつて天火明を大倭に迎えよう。

一、葦原中つ国の国主で正直一徹の猿田彦にこの役を振れば、疑われることもなからう。

一、これと並行して、日神と高皇産霊の伊勢遷座をお膳立てしておこう。

一、この件は、日神には内緒にしておこう。

●天孫火瓊瓊杵の天降り

☆二二〇年、魏王に立つた曹丕そうひ（曹操の兒）は、献帝けんていから皇位を譲られる形を装つて魏王朝

を開き、洛陽に都した。

翌年、四川省を奪った劉備も漢朝（蜀漢）を再興したと称して成都に都し、ついで諸葛孔明を丞相に迎えた。江南の孫権も遅ればせながら呉王に立って、天下は三朝が並び立つ時代へと移った。遼東では、公孫氏が朝鮮半島の楽浪郡・帯方郡を足がかりとして、三韓だけでなく倭まで支配下に組み込もうと動いていた。

二二〇年代前半、日神と高皇産霊は、天孫火瓊瓊杵に対して大倭降臨を言い渡した。

「豊葦原の千五百秋ちいほあきの瑞穂国も大倭豊秋津島も、わが子孫うみのこの王きみたるべき地くになり。皇孫すめみま、そこに天降つて行つて日高見国を興し、東方の守りをしつかり固めるように。天つ日継ぎを重ねることで、天壤あめつち（天地、倭奴国王朝）が千代に八千代に栄えますようにと祈りつつ、この八咫鏡を私の御魂あめつちと思つて祀り続けるように」

『古事記』、「天照大御神、．．（日子火瓊瓊杵命に）詔科せて、『この豊葦原瑞穂国は、汝知らさむ国ぞと言依さしたまう。故、命の随に天降るべし』とのりたまいき。」

『日本書紀』、「皇孫みことのりに勅のたまして曰わく、『葦原の千五百秋の瑞穂国は、是、わが子孫うみのこの王きみたるべき地くになり。爾皇孫いましすめみま、就いでまして治しせ。行矣さ行くませ。宝祚あまつひつぎの隆さかえまさむこと、当まさに天壤あめつちと窮きつり無なけむ』とのたまう」

火瓊瓊杵が高千穂宮から降り立って大倭に向かおうとすると、南北に分かれる三つ辻で、奇妙な格好をした大男が大倭行きの道に立ちはだかっていた。日神と高皇産霊は、天鈿女に命じた。「お前は敵に正面から立ち向かう女だ。お前が出向いて行つて、『道を塞ぐのは、誰だ』と、問いただしてみよ」

さて、天鈿女が出向いて問うと、その男は答えた。

「私は猿田彦です。天孫が大倭に降臨されると知って、お迎えに参じました」

天鈿女は彼の不自然な態度から、「この男は、何か秘密を隠し持っている」と見て取ると、彼に気のあるような素振りも見せながら、道案内をちらつかせた。単純な猿田彦はこれに乗った。そればかりではない。この女をモノにしてやろうという欲まで出していた。彼は口外するなど何度も念を押してから、自分勝手にべらべらしゃべり始めた。

「実は、大物主からの密命を授かって来た。一つは、南蛮船撃退の任にあたる女神大山祇神が父親（祖父？）を介して、『火瓊瓊杵の下で存分に働きたい』と申し送ってきた。そこで、天孫の天降り先を取り替えることになったのだ。

今一つは、伊弉諾がお幽れになったことで、日神夫婦は大倭で大葬をとり行うことになるが、この間にも、南蛮船がこちらに向かっているやも知れぬ。日神は危険の迫る高千穂宮を一刻も早く去って伊勢に遷座し、そこで神国・常世づくりを得心の行くまで仕上げて頂きたいと、皆は切に願っている。私は天孫をお送りした後は、日神を伊勢にご案内する役目も申しつかった」

薩摩への道筋を丸で知らない彼は、再度、念を押してきた。
「秘密を明かしたからには、天鈿女もきっちり約束を守れ。私の妾となって、吾田まで先導してくれ」

天鈿女は彼と約束など交わした覚えがないことで、すっ飛んで帰って日神に有り体に伝えた。ところが、この仔細を知った日神は、高皇産霊との夫婦生活を急いだのか、それとも孤軍奮闘する女神大山祇神に同情したのか、あっさりと方針を変えてしまった。

「女神大山祇神が火瓊瓊杵を所望するなら、天降り先を取り替えれば済むことだ」

火瓊瓊杵がこれに不満をもらしたのも当然だ。この一件も祀りごとにまめな彼が、

「天璽の鏡剣を申し受けた上で、日神夫妻を日天神としてお祀りしたい。それを心の糧として国難に当たりたいと思うが、それにしても主力軍が女神大山祇神一門だけとは心もとなない話だ。所要所に隼人という名の屯田兵を配置して然るべきです」

と言いつつ引き下がったことで、一先ずは決着をみた。
日神は火瓊瓊杵を不憚に思ったあまり、天児屋・太玉・天鈿女・石凝姥、それに思兼・手力雄など忍穂耳に授けた近従をことごとく与えた上に、伯母にあたる豊受姫（登由宇気神）を稚日女役として同行させると決めた。

〈大乱前〉 〈高千穂宮初期〉 〈高千穂宮時代、火瓊瓊杵の降臨時〉

【日神役】 伊奘諾 日神の天照大御神
日神の天照大御神

【稚日女役】 向津姫 稚産霊（厳香来雷の娘） 豊受姫（稚産霊の娘）

準備が万端整ったところで、日神と高皇産霊は、火瓊瓊杵に天（日）・日高とともに日隈も添え与えた。さらに選りすぐった隼人軍団を吾田（阿多）周辺にくまなく配置するとまで言い切った。その上で、天叢雲剣・八咫鏡・勾玉など三種の宝物、天神の御子と印す天鹿兕弓・天羽羽矢を授けて命じた。

「吾田の日前国は、わが子孫の王たるべき地なり。皇孫、そこに天降って治めなさい。天つ日継ぎを重ねることで、天壤（天地）が千代に八千代に栄えますようにと祈りつつ、この八咫鏡を私の御魂と思って祀り続けるように。天孫には日隈を託したのだから、この日矛も授けておく」

その裏で日神は、この鏡と日矛に対して日隈・日前再興の願いを密かに込めていた。つまり、火瓊瓊杵の授かった八咫鏡と日矛は、日隈・日前再興を祈願する祭器にすり替わっていたのだ。

それを知る由もない火瓊瓊杵は天璽全てを手にできたと思ひ込み、薩摩への降臨に潔く応じたのだった。

この直後、高皇産霊は「葦原中つ国平定の任務は全うできた。今後は大倭にあって、義父の大葬をとり行う」との言葉を残して高千穂宮から去った。その手には、相変わらず十握剣があつた。

『古語拾遺』、「天照大神・高皇産霊尊、八咫鏡及草薙剣の二種の神宝を以て皇孫に授け賜ひて、永ひたがらに天璽と為たまう。矛（日矛）・玉（八坂の勾玉）は自おのずからに従う」、

『日本書紀』、『この皇孫を以て親に代えて降さむと欲おもう』とのたまう。故、天照大神、乃ち天津彦火瓊瓊杵尊に、八坂瓊の勾玉及び八咫鏡・草薙剣、三種の宝物たからを賜う」

ここで、重大な秘密を告げておく。それは、日神が火瓊瓊杵に三種の宝物を授ける際に、「この鏡を私の御魂と思つて祀れ」と言つて八咫鏡を手渡したところにある。当の火瓊瓊杵も日神に向かつて、「天璽の鏡剣を共に申し受けて、日神夫妻を日天神としてお祀りしたい」と言つて八咫鏡を受け取ることで、てつきり天璽の鏡と思ひ込んでいた。だが、彼が手にした八咫鏡は、日前鏡に摩り替わつた日の像の鏡だった。

『日本書紀』が八坂瓊の勾玉・八咫鏡・草薙剣（天叢雲剣）を三種の宝物と記すのは、八坂瓊曲玉が天璽でないこと、草薙剣（天叢雲剣）も天璽でなくなつたことによるが、今一つは火瓊瓊杵の手にする八咫鏡が出来栄えの悪い日の像の鏡だったからだ。

では天孫降臨に際して、日神が日の像の鏡を密かに日前鏡と改めたのはなぜか。それは、素戔嗚がこれをかざして豊葦原中つ国建て直しや、熊野家再興に取りかかつたものの、挫折して大己貴に奪われたことにある。火瓊瓊杵がこれに気づくのは、もう少し先のことだ。

天神と天璽についても、確認しておきたい。天照大神が天神から引き摺り下ろされ、日神も自

ら天神を降りると決意したことで、天叢雲劍も真経津鏡も、もはや天璽とは言いがたい。この時から、天神は亡き天鹿兎山一人、天璽も天鹿兎弓・羽羽矢だけとなった。

だが、天孫の二人は、天神や天璽に対する考えが丸つきり違っていた。天火明は天鹿兎山だけを天神、天鹿兎弓・羽羽矢を天璽として敬い、先祖祭祀の場では火天神の祭祀を優先してきた。一方の火瓊瓊杵は八咫鏡と天叢雲劍の二つを「これぞ真正銘の天璽」と見なしたことで、火天神祭祀に先駆けて日神と高皇産霊を祀ってきた。

ところで、この八十年後に日本武が北伐した折、天叢雲劍は草薙劍と改名されたが、『古事記』は素戔嗚の大蛇退治・火瓊瓊杵の天降りの時点から、草薙劍の名を使用してきた。なぜ、後世に決まる劍名が八十年以上前にさかのぼって用いられたのか。そもそも、二つの劍名にはいかなる違いがあるのか、これについても知っておく必要がある。

「当初、火瓊瓊杵は、日の神・高皇産霊を天叢雲劍の名の下で祀ってきた。八十年後の日本武はこれを理不尽に思つて草薙劍と改名すると同時に、高皇産霊御魂と拝して奉った。結局、火瓊瓊杵に肩入れする『古事記』の編纂者らは、これに同調して右ならえしたわけだ」

「景行紀」日本武尊の条、「二に云わく、王（日本武尊）の所佩かせる劍、むら雲、自らぬけて王の傍らの草を薙ぎはらう。故、其の劍を号けて草薙と曰う。」

本書は双方の考えを受け入れる形で、天鹿兎弓・羽羽矢も、草薙劍（天叢雲劍）・真経津鏡も天璽と記すことにした。それは、以後の歴史が天孫の思惑に振り回される形で転がって行くからだ。話を戻したい。火瓊瓊杵が三種の宝物を賜ったことで、高千穂宮の皆は「日神の意中の世継は、彼に相違ない」と受け取っていた。

だが、日神の本心はそうとは限らなかった。日神は火瓊瓊杵が祀りごとに、方や天火明は政に興

味を持つことで、単に役目を振り分けたに過ぎなかった。

さて、出立準備が整うと、火瓊瓊杵は猿田彦と天鈿女を先頭に押し立てながら、意気揚々と天宮から降り立った。そうこうする中に、霧島連峰の麓に到っていた。

火瓊瓊杵はその西に聳える高千穂峰（標高一五七四^ル）の頂きに登り、呉の国があると思しき西の彼方に、続いて女神大山祇神や小千族が踏ん張る南方に長らく目をやっていた。その際、南蛮船の襲来する場所が開聞岳から野間崎の間と見定めたのか、最前線に打って出て采配したいと言いつつ出出した。

そこで、一行はどの国にも属さない牛の背のような尾根を南へ渡り歩きながら、時おり海岸線に目をやっては敵が上陸しそうな入り江や浜辺を丹念に調べていた。

その後も尾根を渡り歩いて南下し、東シナ海に面する砂丘に出た。そこは延々四十^キメートルも続く吹上浜だった。その北方に、野間半島が東シナ海に突き出ている、その先端に野間岳（標高五九一^ル）が聳えていた。この辺りは吾田の笠沙（南さつま市）と呼ばれていた。

『日本書紀』「高皇産靈尊、（火瓊瓊杵を）降し奉る。時に、天忍日尊、・手には天梶弓（梶の木で作った弓）・天羽羽矢を捉り・・天孫の前に立ちて遊行き降来りて、向の襲の高千穂の穗日の二上峯の天浮橋に到りて・・」

「皇孫、天磐座を離ち、・日向の襲の高千穂峯に天降ります。・膺宍の空国を、頓丘から国覓ぎ行去りて、吾田の長屋の笠狭碕に到ります。」

☆火瓊瓊杵が山頂で国見する高千穂峰は、標高一五七四メートルの火山で、山頂には一坪ほどの平地しかない。この西方に標高一七〇〇メートルの韓国岳が肩を並べて聳える。

野間岳の山頂に立った火瓊瓊杵は、そこから呉の辺りに見入っていた。続いて、女神大山祇神や小千族の在所に目をやり、陣立てのほどを確かめてみた。すると、双方とも敵が上陸しそう所にきっちりと布陣していた。

とりわけ坊津は、彼らの先祖・越のオロチ族が怒涛の如く押し寄せてきた入り江だったから、呉の艦隊がここをめざしてくる可能性はすこぶる高いと思われた。

ついで火瓊瓊杵は、吹上浜北方に聳える長屋山（標高五一三メートル）に登り、その頂きから都に相応しい土地をあちこちと探し求めた。そこで、彼はこうつぶやいた。

「ここは海の彼方にあつた空国（滅び去つた韓国、または太伯の呉の国）の真東に位置する。この東海上から昇ってくる朝日が笠沙の真上を通過して空国に照りつける一方、空国に沈もうとする夕日が笠沙に照り返してきて、夕空を真っ赤に染めている。この地は日の神を祀るにふさわしい土地だ」

その結果、長屋山東麓の舞敷野（加世田市）に笠沙宮が置かれることになる。言うところの吹上浜の御所だ。地元の伝説でも舞敷野に笠沙宮があつたとし、そこには今、笠沙宮跡の石碑も建つ。

ある時、火瓊瓊杵は笠沙の都で美しい乙女、木花開耶姫に出会って思わず声をかけた。

「あなたを妻にしたいと思うが、どうだろうか」

「私からはご返事致しかねます。両親がご返事申し上げるでしょう」

と乙女は答えた。火瓊瓊杵がその両親に使者を遣つて返事を求めると、女神大山祇神と夫の事勝国勝（婿養子、伊奘諾の兄）は、姉の石長姫（伊和族からきた養女）も添えて嫁がせたいと申し送つてきた。その際、火瓊瓊杵は猿田彦の労に報いたいとして天鈿女を呼びつけると、

「お前は猿田彦をその気にさせたから、彼と一緒に伊勢に移り住み、日神と高皇産靈にお仕えしなさい。家名も、代々猿田の姓を継ぐがよい」と言つて猿田彦に添寄せた。

その後、火瓊瓊杵は石長姫が大乱の引き金を引く伊和族と知つて親元に送り返し、開耶姫だけと一夜を共にした。女神大山祇神は石長姫を送り返されたことで、火瓊瓊杵にこのように伝えてきた。

「娘二人を差し上げたには、理由があります。石長姫を遣わしたのは、伊和一門の力添えを得て、天神の御子の御世が千代に八千代に続きますようにと、また開耶姫を遣わしたのは大山祇家ともども花の咲きほころぶごとく栄えますようにと、御子の栄華を祈つてのことでした」
このことがあつて一年足らずの間、火瓊瓊杵と木花開耶姫の仲は気まづくなつてしまった。

● 日神の畿内遷座

猿田彦が高千穂宮に舞い戻ると、次に日神一行を邪馬台国に先導する役目が待ちうけていた。その警護役として、経津主と武甕槌が抜擢された。

二二〇年代前半、日神は天（水）一門・住吉族らと一緒に高千穂宮を出立した。一行は五ヶ瀬川沿いの険しい山道を西に向かつて進み、熊本平野を見下ろす辺りから北上した。ついで筑後川に沿つて博多湾に到ると、そこから船に乗つて響灘に乗り出した。さらに日本海を巡る長い船旅を続けた後に、隠岐島を経由して出雲稲佐の浜にたどり着いた。

浜辺には、素戔嗚が八重事代主・味スキ高彦根・大山咋・下照姫を従えながら、千余の兵と共に待機していた。日神はその岸辺に船を寄せると、猿田彦や素戔嗚に順次命じた。

「猿田彦は、丹後の宮津まで道案内に立て。宮津に着き次第、直ちに伊勢に降つて私たち夫婦の

天降り準備を進めておけ。

素戔嗚は新都に移り、天下づくりの補佐役に就くように。葦原中つ国の統治は振り出しに戻して、猿田彦の児に継がせるから安堵するがよい」

次に日神は、復命もしなかつた天穂日を完成間近の高殿に呼びつけるなり、厳命した。

「雲にそびえるこの高殿で、葦原中つ国の儀礼に則りながら、月神とともに火神の厳香具土・厳香具雷・火軻遇突智、それに火天神の神皇産霊・天鹿兎山ら五柱を子々孫々に至るまで祀り通せ。あわせて、日隅宮に鎮座する熊野櫛御氣野や大穴持の御霊も蔭ながら慰めておけ」

☆天穂日の末裔である千家^{せんげ}家には、平安期の高殿を描いた金輪造営図の原本が伝わる。言い伝えでは、本殿の高さは現在の二倍、十六丈もあつたという。

☆平安初期（十世紀後半）、源為憲が詠んだ口遊^{くちずきみ}、「雲太^{うんた}、和二^{わに}、京三」なる歌が流行つた。つまり、当時が一番高い建物は出雲の社、二に奈良の大仏殿、三に京の大極殿という意だ。この高殿と日隅宮は、その後どうなったのか。これと現大社との関係はどうなのか。これについてこう考えたが、どうだろうか。

「平安時代の末期まで、高殿では月神とともに火神の厳香具土・厳香具雷・火軻遇突智、それに火天神の神皇産霊・天鹿兎山ら五柱の祭祀が久しく続いてきた。

大己貴が庵を構えた日隅宮でも、熊野櫛御氣野と大穴持（大己貴）が密かに祀られていた。



金輪造営図から復元した高殿

ところが金輪造管図が描かれた直後に、この高殿は大地震で全壊して再建もまま成らなかつたこととで、五柱の祭祀も途絶えてしまった。その後は、日隅宮が本殿に成り代わる形で発展した」

その日隅宮が杵築大社に発展する過程で、当初の祭神・熊野櫛御氣野と大穴持は、中世になると熊野櫛御氣野（素戔嗚）・大穴持（大己貴）へ、近世には大穴持（大己貴）へ、今日では大国主大神へと移り替わった。いずれが正しいかは、以下と照合しながら推察して頂きたい。

(1) 出雲大社が背黒海蛇を神の使いとすること。

(2) 『出雲国風土記』は杵築大社きつきについて、「伊奘諾の真名子まなこ（可愛がつていた児）熊野櫛御氣野、国造りましし大穴持との二所の大神を祀る」と記す。

(3) 杵築大社は、かつて八百丹杵築宮と呼ばれてきた。その意味は、「多くの国つ神が寄り集まる宮」だという。

ついで日神一行が津々浦々を経由して丹後宮津に到ると、大倭や播磨から駆けつけた高皇産靈・天火明・大己貴、出石の天日槍がそろって迎えに出てきた。そこで、日神と素戔嗚は、天日槍に命じた。

「直ちに紀伊名草に赴き、仮宮を拵えておくように。いずれ、熊野家をその地で継がせる」

その後、日神は夫の勧めるままに丹後宮（籠神社の地）にしばし滞在していた。夫の方は、大己貴警護の下で大倭に引き返すや、天照大神の立場に戻っていた。猿田彦はその足で伊勢の二見へ旅立った。

以後、天照大神は味スキ高彦根・八重事代主に嚴重警護される中で、金剛山東麓に仮住まいしながら、新都造営・大葬準備・日高見建国に向けて矢継ぎ早の指示を出していた。

☆葛城山の南に聳える金剛山は、古代には高天山と呼ばれた。その西麓には、高天の地名が

残り、そこに鎮座する高天彦神社は高皇産靈を祀っている。

☆それまでの纏向の都は、西は石塚古墳辺りから東は巻向駅周辺にかけての一带、つまり庄内式土器の遺構が多数出る東田・太田・巻野内西部に限られていたが、このたびの新都造営によつて、勝山古墳・東田大塚古墳・箸墓古墳、珠城山・穴師をすっぽり包み込むほどに広がった。

上之宮と呼ばれたヒミコの宮殿も、上ツ道沿いの辻・巻野内辺り（巻向駅の北）に築かれることになる。

暫くすると、丹後に滞在する日神と素戔嗚も、宮津を発った。日神は大葬前に舅姑に縁ある土地で御魂を慰めておきたいと念じたのか、西宮から淡路島に回って伊奘諾の幽れの宮を訪ねた。

その頃、天日槍（五十猛）は大勢の匠らと一緒に名草（和歌山市）へ向かった。

こと、浜の宮落成に漕ぎつけていた。日神と素戔嗚は、そこに着くなり詔した。

一、素戔嗚が出雲で興した熊野家（出雲日隈）を紀伊秋月の地で、熊野家本家として再興するがよい。紀伊・熊野に散らばる大山祇族や熊野家の一門も束ねるように。

一、この約定の印しとして近々に、日矛、日の鏡など日隈神宝を授けよう。

一、当地で誉れ高い大屋彦を襲名するように。

結局、日隈は日前鏡を奉祭する熊襲の日前（熊襲とも呼ぶ）、それに日矛を祀る紀伊熊野家（以後、熊とも呼ぶ）の二家が並び立つことになる。

その後、日神らは浜の宮にしばらく滞在した後、五十猛の道案内で熊野へ向かった。彼女はそこで夫や舅姑の故地を訪ね歩き、花の窟むらやでは姑の霊前に花を供える心づもりをしていた。